

裏面の話題

みんなの居場所の裏面も、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和4年9月20日(火)

みんなの居場所

随想「多忙」と「多忙感」

県内某市教育長のお話です。

「思うに『多忙』であることと『多忙感』を持つことは大きく違うのではないか。教師は生徒に寄り添い、生徒が成長しているときは、忙しくても充実感があり多忙には感じないものだ。生徒も同じである。」

「このお話の中の『多忙』『多忙感』という部分は、『負担』『負担感』という言葉を代入しても成り立つのではないだろうか。負担は多忙、若し意味に違いはあるものの、充実した毎日を送っていれば『負担』があっても『負担感』は感じないで済むのではないだろうか。

私は、教子達と永い付き合いをしたいと思つて仕事をしました。お陰様で、最年長の教子は44歳、最年少は23歳、多くの教子達に囲まれ、節目に我が家を訪ねてくれたり、電話をくれたり、楽しい教職生活を送ることができています。今でも子ども達と接する機会ができています。この充実した生活を送るためには、担任時代に味わった苦しみや心を鬼にしたこともあります。そして生まれた私の「教育信条」を紹介いたします。今でも振り返りの視点として使っています。

- 甘やかしの関わりは子どもをダメにする
 - 指導のない関わりは子どもをダメにする
 - 逃げ腰の関わりは子どもを増長させる
 - 本気でない関わりはすぐ見破られる
 - こだわりを持った関わりはいつか理解される
- この信条、常に自分を振り返るための指標として、日々の振返り、自己反省していかねばならないというばかりだと思えます。まだまだ、思ひ詰まらないうちのうちに、精進が足りないように思っています。

「費用対効果」を考へる

費用対効果とは予算と効果を額面で比較したものと云ったらお解かりでしょうか、簡単に言うに「元が取れたかどうか」ということです。私たちが教師の仕事はこれが中々測りにくい仕事です。教育活動の結果がどこで現れたか解らないからです。私の場合、それを測る物差しは、結婚式であったり、同窓会であったり、身の上相談の件数であったりでしょうか。自體話になるかもしれませんが、我が家は元日から教子達が年始にやってくる。正に教子達の縦割りの活動のようになっています。この子達が自分の子どもを連れてきたり、結婚してきたり、結婚して相手を選んできたり、嬉しい一日となっています。そのようないい日となっています。私自身の教師としてのパフォーマンスを検証する機会となっており、自分のパフォーマンスに間違いは無かったと確信する場面でもあります。

さて、教師を含め社会生活を行うすべての人に自分のパフォーマンスの検証の視点として「費用対効果」の視点は重要視す。給費(税金)分の仕事ができているかどうかということとです。私の個人的な考えですが、教師は常に時代に合わせた教育活動を展開しなければなりません。常に新しいことに挑む姿勢が必要なのです。教師自身のアップデートが必要なのです。私はこれまで、新しい仕事(依頼)を二返事で引き受けてきました。それが自身のアップデートに繋がったと思っています。

シリーズ「自分を語る」#300

2学期のある日、黒石原の一人の子ともは身をもって私に大切なことを教えてくれました。それは、教職生活の中で最大の学びです。

ある日の朝、健太(仮名)の担任が血相変えて病棟から帰ってきたのです。職員室に駆け込むや否や、その先生は泣き崩れました。

「健太君が死んでしまった……」

私は何を言っているのやら状況が掴めませんでした。「さっさと帰って」って帰った時は体が動かせず、茫然目失った状態でした。死因は呼吸不全でした。前日、病棟に帰る時に異常はなかったのですが、真夜中に痰を外に出せず急性肺炎を発症してしまい、看護師さんが気付いた時にはすでに心肺停止状態でした。享年6歳、小学1年生でした。

次の日、通夜、あくる日葬儀・肅々と進んでいく儀式。健太の人生は6年、とよんな人生だったのでしょうか。棺に収まる健太の顔はとても穏やかでも綺麗でした。私達に何かを訴えているようにも見えました。

健太の人生は我が家の人生の回分の……。まだやりたいことが沢山あったはずで。自問自答の日々を続け、健太の死は私にある変化をもたらしました。

子ども達の貴重な時間を私達教師が預かっている。目の前にいる子どもの成長は止められない。土曜日も曜日も夜も止まらない。止まらない人生の半分を私達教師が預かっている。その責任の重みを私達教師は自覚し、子ども達を保護し、地域住民、県民、国民からの負託に感念しなければならぬ。教師であり続けるために、私は24時間責任の重みを自覚し、初心を忘れず子ども達と向き合っています。

私が黒石原養護学校にいたのは平成23、34年度でした。その間にも多くの教子達が亡くなり、その度に淋しい想いをすると同時に、自分の教師としてのパフォーマンスは、期待に込められたようなうかつな振返る時間でもありません。目の前には生き生きと頑張っている子ども達も沢山いるので、悲しみに暮れてばかりはいられません。毎年、子ども達の美態は変わります。その子達の一人一人と合わせ、楽しく思い出深い、掛け替えのない学校であるべきを自覚した時間でした。今でも、頑張っている教子達(もう、いい年のおじさんですが……)とパソコンでメールのやり取りをしています。彼らに教えてもらったことを胸に、教師として恥ずかしくない仕事をしていきたいと強烈に思っています。

黒石原の経験は多くの自分のパフォーマンスの原点や言えるものですが、楽しんで厳しくが入り混じった、結構過酷なものでした。私は教子への入浴遠隔と死を経験し、自分の考え方を180度方向転換しました。

それから、只々がむしゃらに、教育活動の良し悪しなどはあきらめず、子どものためにという視点に立って取り組みました。当時の校長は、「正しい」「やりたい」と思っていたことをおぼえてみたらどう思ったかどうおもったか、かなハチャメチャな活動をしていくことを思い出しています。(ついで)